
ホットニュース(平成15年度／第70号)

●「バリアフリーのまちづくり」の話題(その1)

国土交通省の社会資本整備審議会が、国際化、情報化、高齢化、人口減少等21世紀の新しい潮流に対応した都市再生のあり方について検討した結果を「都市再生ビジョン」としてまとめ、昨年末に国土交通大臣へ答申した。

この都市再生ビジョンによると、これからのまちづくりは、自宅から徒歩・自転車、公共交通機関で行ける範囲に、商業施設、病院、福祉施設、文化施設などを配置し、日常生活の諸機能が集約された徒歩生活圏を形成し、過度なクルマ依存社会からの脱皮を目指すとしている。そのため、徒歩・自転車・公共交通機関を連携させた戦略的な都市交通政策の展開や、主要な駅周辺における交通結節点の整備と快適な歩行空間の創出及びバリアフリー化の積極的な推進などが、緊急的・優先的に取り組むべきアクションプランとして挙げられている。

近年、交通バリアフリー法やハートビル法等の制度の整備により、バリアフリーのまちづくりが進められてきているが、都市再生ビジョンを踏まえると、今後もより一層進展することが期待できる。次号は、最近のバリアフリーのまちづくりに関連する話題を2つ紹介する。(次号へつづく)

(第一計画部 永元 真也)

●今、都市計画屋が見るべき森への一考

私事で恐縮だが、この年末に、初めての入院と一時障害者を体験した。

入院仲間は体重22・、拒食症の超スリム女性と、対照的な超肥満女性。当然両者ともに生命に関わる程重症だが、スリム嬢は「また1・やせちゃったの…」といいながら、配られた食事に手もつけずパタパタ返しに行ってしまう。必要なのは、今罹っている肺炎の治療だけではなく、精神的なケア、栄養学や料理の創意工夫等々ではないかと思ったのだが、後者が十分行われているとは考えにくい状況だった。

また、私の退院後おおせつかった準安静生活では、「階段の昇り降りもダメ」とのことで、当然「む、この歩道は段差が高いし、繋がってないぞ。このまま車道を歩こう…」と、日頃の業務に逆らった行動に終始せざるを得なかった。

株式で儲けるのに「森を見ずに木を見よう」という戦略もあるそうだが、森も木も元気にしていくのはなかなか容易なことではない。建築や容積緩和、道路計画などと街づくりからの在り方のバランス等々はまだ木と林の話かもしれない。都市計画屋が今こそ見るべき森は何なのか、例えば「環境と都市」という森について「拒食症患者への肺炎治療で終わっていないか」等、改めて考えさせられた。

(第二計画部 坂井 雅子)

●スローライフと地域づくり考(その2)

前回、スローライフという生活哲学が地域づくりの重要な視点となり、農村集落の再生の新たな展望として有効である点について書いた。では、具体的に農村集落の再生をどのように展開していくべきなのか。農村は自然環境を保全し、共生して人々の生存に関わる基礎的資料を生産する農の

営みという共通目的のコミュニティで成り立ってきたが、現在は離農、過疎化、高齢化、等々の諸問題により崩壊の傾向にある。

しかし、豊かな自然環境や四季折々の新鮮な食材、都心では手に入れ難いゆとりある住空間といった、スローライフの生活志向にマッチした要素が豊富であることも事実である。従って農村集落の再生には、農業本来の振興対策と併行しつつも、農村に内在する良好な環境を享受し、ライフスタイルを楽しむ人々を受け入れられる環境を整えることが課題となる。

農業以外を生業とする新たな人々の受け入れについては、先ず「職」の対応が必要となる。これについては情報通信基盤整備を整えてテレワークの一層の促進に期待したい。農村におけるIT化は農業経営や防災情報といった面にも効果があり、こちらについては農水省が「e-むらづくり計画」として推進している。

農村集落では、これまで「生活の場」と「生産の場」が同一であるために環境共生という方向に向いた一要因ではないかと考える。テレワークも同様に、在宅勤務により自分の時間が充実すれば、人の活動や感心は自ずと自宅周辺に目を向けさせると思う。

そうした中で、伝統行事や地域活動などを通じて既存営農者と新住民との交流を育成し、さらにはコミュニティビジネスや地域通貨といった相互扶助システムの構築へ発展させるべきと考える。家族の次に社会の基礎を成すのは仕事とそれを通じた人間関係である。まずはこうした小さな単位の地域社会を構築し、その中で経済の外部流出を抑制し、自立型生活サービスが充実することが重要である。

また、農村集落の人々が自分たちの地域を誇りに思い、愛する気持ちの醸成も必要であり、これは環境をキーワードとした価値観の共有化が重要と考える。特に環境保全型農業の促進と環境リーダーとしての農村集落の存在意義を高めていくことが求められる。今日の産業技術は未だにエネルギー問題を克服できていない。近い将来、石油に変わる代替資源を農業資源作物に頼らざるを得ない時代が到来すると予想する。「我が国は地下資源ではアラブ”を”うらやむ資源小国だが、バイオマス資源ではアラブ”も”うらやむ資源大国」と言った人がいる。今後は、バイオマスの生産と利用を促進し、農村集落が食料と産業資源という二本柱の生産の場となり、持続可能な社会構築の核となる機能を発揮することが、地域の誇りにつながるのではないかと。

こうした地球環境に大いに貢献する農村集落の中で、営農者と非営農者が生活サービス機能をも発揮する共通目的のコミュニティを構築し、経済優先の社会スピードに惑わされることなく、ゆったりとした時間の中で旨い地場産品を楽しみ、良好な居住空間で家族と生活を共にできる環境の創出が、スローライフな地域づくりの一方策となりえるのではないかと考える。

こうした地域づくり、とりわけ農村集落の再生はスローな取り組みでは駄目である。何故ならこうしている間にも優良なステージは崩壊しつつあるのだから。

(第二計画部 海口晴彦)

アルメックホットニュース(平成16年1月15日発行)

////////////////////////////////////